

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	大石 高典
論文題目	カメルーン東南部における農耕民＝狩猟採集民関係 —市場経済浸透下のエスニック・バウンダリーの動態—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中部アフリカ・カメルーン東南部ジャー川下流域に居住する農耕民バクウェレと狩猟採集民バカを対象に、自然に強く依拠した生活が市場経済へと包摂されつつある中で、両者の共存がどのようになされているかを生態的、社会経済的、文化的側面から検討したものである。</p> <p>序章ではまず、農耕民＝狩猟採集民関係に関する従来の研究パラダイムが検討される。生態人類学的な色彩が強かったわが国のアフリカ熱帯林研究においては、歴史研究の立ち後れが指摘されてきた。本研究では、両者の関係の変化を外部世界との交渉史のなかに位置づけ、そこでどのような境界維持がなされているかを生活と象徴の二つのレベルから明らかにしようという方向性が示される。</p> <p>第1章で調査地域と研究対象の人々の概要が示されたのち、第2章では聞き取り調査および歴史資料にもとづく、調査地における過去100年間の地域史が論じられる。それはおおよそ3つの時代に区分できる。第1期は1910年から50年代後半のフランス植民地期で、植民地政府により住民の強制移住・集住化がおこなわれ、ゴム採集とカカオ栽培が農耕民に課された。その結果、バカの労働力の重要性が高まった。第2期はカメルーン独立から70年代後半の熱帯林伐採事業の開始までで、バカによる農耕受容が進展した。第3期は80年代から現在までで、バカは農耕民による媒介なしに直接、市場と関係を持つことが可能になったが、一部のバカたちはバクウェレや北部から来た商業民のプランテーションにおいて賃金労働をおこなうようになった。</p> <p>第3章では、バクウェレの、バカを伴った長期漁労採集行が分析される。定住村落から漁労キャンプへの移動によって、生業活動や食生活が変わるだけでなく、両者の社会的関係性が対立から融和へと大きく変化することが明らかになった。この変化は両者の社会的緊張の解消や関係の組み替えに、大きな意味をもっていると考えられた。</p> <p>第4章では、バクウェレとバカの相互表象に関して、ゴリラとのかかわりから論じている。両者は互いを半人間、半動物という形でネガティブに認識しているが、そういった象徴的認識は、実際のゴリラや害獣動物との遭遇経験を通して、日常の相互行為の中で再生産されていることが明らかになった。</p> <p>第5章では、バカによるカカオ栽培の実践に焦点が当てられる。換金作物であるカカオの栽培は、バカが農耕民の仲介なしに直接市場にアクセスすることを可能にした。その結果バカは、政治経済的な自立性を高めつつあるが、反面、個人間の経済的不平等が拡大し、平等主義的な規範との間に葛藤を生み出していることが明らかになった。</p> <p>第6章では、嗜好品としてのたばこ酒が、狩猟採集民＝農耕民関係の維持や再編</p>			

にどのような役割を果たしているかが検討された。たばこや酒は、かつては物々交換の枠組みで農耕民から狩猟採集民に贈与されるものだったが、現金の流通が本格化すると、それらは商品化することになった。バカの嗜好品への強い欲求が、彼らを市場経済の中へ統合するおおきな要因となっていることが明らかになった。

第7章では、土地をめぐる民族間の関係が検討されている。調査地では最近、カカオ園の貸借慣行が広まっているが、それはローカルな金融システムとして機能し、農地をおいたまま長期間定住集落を不在にすることが可能になり、また収穫物の分配をめぐる葛藤が融和されることになった。しかし反面、返済が不能となった場合は現金の代わりに土地の所有権が要求されることもあり、新たな対立を生んでいるという実態が示された。

終章では以上の結果を受けて、農耕民と狩猟採集民の関係が市場経済化の進展と関わりつつ変容してきたありさまが総合的に論じられる。カカオの国際市場価格の上昇は、バカの定住化・農耕化を促進したが、一方で一部のバカは賃金労働者化した。市場への直接的なアクセスは、バカに経済的成功の機会を与えているが、それは同時に、土地を失い、搾取されるリスクも引き起こすことになった。バカとバクウェレの間の物々交換を通じた相互依存関係は弱まり、地域社会はエスニシティではなく社会階層化によって分節する傾向も見て取れた。しかしそういった中でも、象徴実践においては二項対立的な相互表象が維持されており、その背景として、地域社会と自然との強い結びつきがあることが示唆された。

(論文審査の結果の要旨)

約 1 万年前の農耕・牧畜の開始まで、人類は数百万年にわたって狩猟採集生活をおこなってきたが、現在残存する狩猟採集民は全人類の 0.001%にも満たない。多くの狩猟採集民は人口減によって消滅したか、近隣の非・狩猟採集民に吸収されてしまったと考えられる。しかし今日でもアフリカには、南部のブッシュマン、熱帯雨林のピグミーという大きな狩猟採集民集団が残っている。彼らは周囲の牧畜民、農耕民と共存しつつも、それらに同化することなく現在に至っている。この「分離的共存」という興味深い事態はどのようにして成立してきたのか。本研究は、カメルーン東南部に同所的に居住する狩猟採集民バカ・ピグミーと農耕民バクウェレに焦点を当てつつ、両者の共存のメカニズムとその将来について考察したものである。

ピグミー系狩猟採集民と農耕民の関係については、これまで多くの研究が蓄積されてきた。ターンブルはイトゥリ森林のピグミーの調査から、「森の世界：村の世界＝ピグミー：農耕民」という二項的対立的関係を描き出した。一方、市川、寺嶋ら日本の生態人類学者は、農耕民からの農作物・金属製品の供与、狩猟採集民からの森林産物・労働力の供与という、生態学的な共生関係を明らかにした。しかしこれらの研究では、以下の点が不十分であったと言える。まず、研究の視点が狩猟採集民側に偏ったものであり、その結果、状況がステレオタイプ化して捉えられるきらいがあった。第二に、関係の通時的な動態を扱うという歴史的視点が希薄であった。第三に、狩猟採集や農耕といった伝統的な生業は詳しく扱われているが、近年の外部世界のアクターとのかかわり、市場と連動した生活実践の変化に関してはほとんど分析されてこなかった。

本研究は、上記の点をカバーしつつ、現代に生きる農耕民と狩猟採集民の関係に新しい光を当てようとするものである。大石氏は 2002 年から今日に至るまで、調査地であるカメルーン東部州ドンゴ村に長期にわたって住み込み、その高い語学力を生かして現地のバカ・ピグミー、バクウェレ、そして外来の商業民たちとの間に親密な関係を築いてきた。研究ではまず、河川沿いに分布する放棄集落の植生調査に加え、住民への聞き取り調査、文献による歴史復元によって、過去 100 年にわたるこの地域の詳細な歴史を明らかにした。次いで、漁撈活動への参与観察といった生態人類学的な調査とともに、嗜好品利用の参与観察、カカオに代表される換金作物栽培や土地貸借の調査といった社会経済的視点から、グローバル化し市場経済・現金経済が侵入してきた現代の状況下での農耕民＝狩猟採集民関係を描き出した。このような多様な調査手法の統合は、文理融合を体現した地域研究の好例であると評価できる。

そういった調査から明らかになったのは、上位の農耕民・下位の狩猟採集民といった固定的な社会階層や、生態学的共生関係といった描像では捉えきれない、アンビバレントと言ってもよい両者の複雑な関係性であった。定住村においては両者の関係は対立的な様相を帯びるが、森林内の長期漁撈採集行において、それは融和的な方向に変化する。また他者表象のレベルでは、彼らは互いに相手を、ゴリラや小動物になぞ

らえて揶揄し合っている。このような関係性が、両者の「分離的共存」の基盤となっているのである。一方、近年の社会経済的変化の中で、バカ・ピグミーはみずから商品作物を生産し、経済的に農耕民から自立する契機を手に入れているが、彼らの中には、酒やタバコといった嗜好品に溺れたり、農耕民や商業民に安く土地やカカオを買い取られるといった状況に陥っているものも多いことが明らかになった。大石氏は「間にはいる地域研究」というスローガンのもとに、両者の間をとりもつ応用人類学的な実践を構想している。

以上のように本研究は、豊富で緻密な現地調査と文献研究を基盤として、現代における農耕民＝狩猟採集民関係の実態と将来への展望を明らかにすることに成功している。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 26 年 1 月 14 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。